

将来のまちづくりを担う子どもたちを育てるために ～中高一貫・高大連携の視点から～

陸前高田市教育委員会

教育長 山 田 市 雄

陸前高田市は、震災前は人口2万4千人あまり、高田松原で有名なところでした。それが震災によって、市の行政機能、生活の基盤がほとんど失われてしまいました。

今、陸前高田の子どもたちはどうなっているかと申しますと、学校教育で一番大事な「知・徳・体」のバランスが崩壊してしまったということです。子どもたちの約3割以上が仮設住宅から通っています。食事をする場所、テレビを見る場所、くつろぐ場所、みんな同じ場所で過ごしています。また、校庭には仮設住宅が建っていますので、体育活動がほとんど出来ないという状況です。そして経済的な基盤も失われ、就学支援が必要な人が4割います。

このような状況の中、知育の面では、特に、家庭学習の取組が良くない状態であり、それを解決するために「学びの部屋」を開設しています。中学生を指導するOB教員、学生ボランティアが放課後子どもたちを指導しています。この「学びの部屋」のねらいは、子どもたちが安心して過ごす「三間」を提供することです。一つは空間です。「学びの場」として安心安全な教室を提供しています。二つ目は時間です。学習時間を確保するという事です。そして、三つ目は仲間とふれあう場を提供するという事です。

次に、体の部分については、文科省が実施している平成24年度体力運動能力調査結果を震災前のもものと比べると、小学生女子が特に落ち込みました。これも、震災前の状態に戻していかなくてはならないということで、各学校で様々な取り組みをしています。ある小学校の取組

みでは、筑波大学からほんの数分間でできる体力向上プログラムをいただいて、廊下で縄跳びや体操をして、体力向上に取り組んでいます。

このように、様々な支援と連携を基軸として教育を充実させていくことに取り組んでいます。また、学校の統合も考えていかなければなりません。それに伴って必然的に小中連携の流れも高まってきています。

それでは、街づくりを担う子どもたちを育てるための視点についてお話しします。そのためには、小中連携はもとより、中高そしてまた高大の校種間連携が非常に大事なことと思っています。本市の子どもたちの意識調査の結果、8割の子どもたちが将来陸前高田市の街づくりに貢献したいと思っているが、何をやらたいかわからないという意識を持っていることがわかりました。そのような子どもたちの意識を実現していくために、校種間連携で人材育成の取組へとつなげていきたいということです。

話を変えますが、私は、平成20年に本県初の公立学校中高一貫校を立ち上げるため、その準備をし開校しなさいという命をうけて、一関一高に赴任しました。人材育成と県政課題の解決を目指して平成21年4月に県内初の併設型中高一貫校をスタートしました。特徴としては、次世代のリーダーを育成するために、中高一貫して人間性を高めるプログラムを実施することが挙げられていました。

具体的な取組といたしましては、豊かな心の育成やレベルの向上を目指すことをねらいとして、中高一貫となった諸行事の実施、部活動の中高一貫化を図りました。次に、高校教員によ

る中学生への指導も行いました。先を見越した形で高校教員が指導していくことは大事なことであったと思います。それから十分な授業時間の確保もいたしました。



このように、中高一緒に活動することによってどのようなメリットがあったかと申しますと、中学生は高校生に強いあこがれを持つようになりました。そのことによって、早く私たちも高校生になりたいと自分の目標というものが明確になっていきました。逆に、高校生も中学生が入ったことによって手本とならなければならないという自覚が生まれました。むしろ、中高一貫校になってよくなったのは高校生の方かなとも感じています。

続いて、平成22年から23年の2年間、盛岡第三高校に赴任しました。創立50周年を迎える時期でしたが、この学校は毎年200名以上の現役国公立大学の合格者を出しておりました。しかし、以前の盛岡三高は、大量の課題、早朝、放課後、あるいは土曜日の課外授業等、どちらかという物量で成績を伸ばすといったところがありました。その結果、生徒の学習態度が受け身になってしまって生徒に自主的な学習習慣が育成されていたとは必ずしもいえないところがありました。

この状況を打破するために、生徒が学習や学校生活に対して、もっと自主的に主体的に取り組むようにするための学校改革に取り組んだわけです。そこで、目玉となったのが「Dプラン」です。自ら考え、自ら学び、自ら発信する、プレゼンテーションとディベートを中心としたものです。これによって生徒に思考力、判断力、コミュニケーション能力、表現力を身につけ

せようというものであります。その一方では、受身的な学習から脱却するために、土曜日課外とか早朝課外、そういった物量で生徒の学力を伸ばすことではなく、課題や宿題の適正な量を図りながら、授業で勝負する、質で勝負するというのを合い言葉にして、学校全体で取り組んだわけです。その結果生徒に明るさが戻り、校内の雰囲気が大きく変わったという声が聴かれるようになりました。中でもDプランで培った、「自ら考え、自ら学び、自ら発信しよう」という取組は、授業改善にも非常に大きく功を奏し、生徒、保護者へのアンケートでも好意的な評価が上がってまいりました。

教育目標も大きく変えました。「これからの時代のリーダーを育成する学校」、つまり単に生徒の進学目標を達成するだけではなく、学校生活を通じて将来にわたって社会に貢献する、社会で活躍する、そういう資質や能力を身につけることができる学校を目指したわけです。しかし、Dプランは確かにそういう力を身につけることには大変重要だったわけですが、一方では、文系的な要素が強く、理系的な要素を伸ばすことは、なかなか難しかったと思います。

そこで、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、平成23年からの5年間にわたって、国の方から総額6000万円ものお金をいただき、広く人材を育てる事業に取り組みました。これによって、大学や企業との連携が大変深まり、成果といたしましては、専門知識が広がり、生徒の科学的なリテラシーが向上いたしましたし、そしてまた科学的に分析し整理する力が育成され、課題解決能力の育成につながったのではないかと思います。

以上、焦点が絞り切れませんでしたでしたが、校種間連携の成果といたしましては、先を見越した教育活動ができる、学びの継続性が図れる、校種間同士の情報の共有ができる等がありますが、次のシンポジウムでもお話ししたいと思います。また、本市で、これから進めようとしているのは横の連携です。小中の連携も大事です、学区内の小学校連携それから中学校連携が大事だと思います。

私が今まで取り組んできた連携ということについて、以上で発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。